

読み物としての寛永整版本『竹齋』

寺本 旭

一 先行研究・問題提起

『竹齋』は、江戸時代初期の仮名草子であり、上下二巻で構成されている。そのあらずじは、京に住む藪医師・竹齋が貧しさから住まいを移すことを思い立ち、下僕のにらみの介と共に諸国を巡るというものである。物語の流れは、京内参り、京都から名古屋までの東下り、名古屋での療治譚、名古屋から江戸までの東下り、江戸見物の五つの場面で展開する。紀行・笑話・狂歌といった様々な性格を持つ作品で、後に模倣作も多く作られる程の影響力を持っている。

また『竹齋』は、その諸本にも特徴がある。それは、古活字本と整版本の二つの版本が存在し、両者の間には大幅な異同が見られるという点である。松田修「『竹齋』の成立―仮名草子の時好性―」（『國語國文』第二六巻第三号、一九五七年三月）によると、古活字本が元和七年から九年（一六二一年～一六二三年）の間に書かれ、その後、整版本が寛永三年から十一・二年（一六二六年～一六三五年）までの間に成立したと推測されている。

寛永時代に行われた整版本『竹齋』の改訂について、先行研究では否定的な評価が多かった。入口敦志氏は、「『竹齋』考」（『語文研

究』第七〇号、一九九〇年十二月）において、古活字本の作者と整版本の改訂者の同一視に疑問を呈したうえで、次のように述べている。

このように整版本では、古活字本にあった竹齋の物語という性格を薄める方向の改訂が行われている。またそれと並行して、前述した井浦氏の考証^{注1}にあるように、竹齋とは直接関わらない教訓や学道論への傾斜や敷衍がみられる。そういった傾向の最たるものが、整版本の京内参りの最後の部分に増補されている黒谷での衆道の一件である。この部分は竹齋とは何の関係もなく、さらに整版本全七十一丁の内十八丁半、全体の約四分の一をしめており、全体の統一を大いに妨げていることは言をまたないであろう。

入口氏が指摘した黒谷の衆道話は、古活字本と整版本の間に見られる複数の挿話の一つであり、作中で最も目立った異同である。「全体の統一を大きく妨げている」という指摘から分かるとおり、整版本の改訂は調和の取れていない不自然なものであるとみなされている。この意見に代表されるように、『竹齋』研究の比重は長らく古活字本の上に置かれていた。

石井裕子氏は、黒谷の衆道話の挿話について、『竹齋』考（『二松学舎大学人文論叢』第三九号、一九八八年七月）の中で以下のよう
に言及している。

しかし、近世に入ると僧侶階級に代つて政治的には武士階級が、経済的には町人階級が文化の担当者として登場したため、男色もまたこの二つの階級を地盤として栄えることになったのである。そして、『田夫物語』にみられるように、田夫者（女色黨）と華奢者（男色黨）との論争に託して、男色の不自然で社会に有害なものであると説いた作品も刊行されるに至つたのである。つまり、こういった男色否定の書があらわれなければならぬ程、男色は新しい地盤に根を張り、強力に支持されていたことがわかる。しかも素材となるような事件も、実際にあつたのかもしれない。

このような風潮の中、『竹齋』にも男色を求める読者が増えるのは当然である。そうすると板が新しく変わることもあつて、多少の不自然さは残るものの、この黒谷の切腹事件を二十二丁余りにも及んで、書き加えるに至つたのではないだろう
か。

石井氏は「不自然さは残る」という言葉を用い、整版本の改訂を肯定的に論じている。ただし、衆道話の挿話以外にも、作中の随所で大小さまざまな改訂が行われているにもかかわらず、整版本『竹齋』の評価は、一場面に焦点を当てた考察に留まつている。

増補・改訂をどのように評価するにせよ、整版本は古活字本の反響を受けて作成されたと考えるのが妥当であろう。仮に古活字本の作者と整版本の改訂者が異なつていたとしても、同様のことが言え

る。では、整版本において大きな改訂が施された事には、どのような意図があるのだろうか。

なお、古活字本と整版本の異同に着目した『竹齋』論として、世の中への強い風刺を読み取る立場がある。矢野公和氏「風化の凝視者——『竹齋』序説——」（『国語と国文学』一九八一年十一月）では、以下のように述べられている。

「整版本の場合、そうした竹齋の姿が意味しているのは、とことん迄落ちてしまつていても、未だ自らの潔白を信じ、何かにしがみつこうとしている人間の「愚かさ」そのものである。若し整版本に笑いの要素があるとすれば、そうした人間の浅ましさに対する悲しい笑いであると言えるであろう。（中略）」

批判を内に秘めた竹齋像が、整版本に於いて最も洗練された形を持つて登場するのは、既に見た通りであるが、そのことは、自虐によつて世の中を諷刺するというスタイルが、整版本に於いて突如として生み出されたことを意味しはしない。（中略）」

この作品には社会体制そのものを否定的に把える視点が潜められていたのである。

矢野氏の他にも、本来『竹齋』が作られた動機は世相への強い批判精神であり、整版本ではそれがより強められているとする論がある^{（注10）}。しかし、こうした意見においても、整版本『竹齋』は、古活字本との部分的な比較に用いられるのみである。このような、作品のテーマを世相への批判に限定してしまう読み方も、『竹齋』が持つている様々な要素、殊に滑稽話としての魅力を看過してしまつているように思われる。果たして、『竹齋』は最初から世相批判の

ために書かれたもので、作品が持つ滑稽性は副次的なものに過ぎないのだろうか。

こうした問いに答えるため、本稿では、『竹齋』の古活字本と整版本の本文全体を通した異同の傾向を調べたうえで、寛永整版本『竹齋』の改訂がどのような意図のもとに行われたのかを考察し、整版本の再評価を試みたい。

二 異同の分析

『竹齋』整版本と古活字本の異同を調べるにあたり、朝倉治彦校訂『竹齋』（古典文庫、一九六一年）を参照した。また、本文の解釈にあたって、古活字本は「假名草子集成 第四八卷」（東京堂出版、二〇二二年）、整版本は「日本古典文学大系 假名草子集」（岩波書店、一九六五年）を参考とした。本稿で引用する『竹齋』本文は、朝倉氏の対校本をもとに、濁点を施したものである。

先述の黒谷での一件のように、エピソードそのものが追加された大きな異同は、『竹齋』という作品全体の解釈に少なからぬ影響を与える。一方で、文章の大意が変わらない小さな異同も多い。例えば北野参りの場面で、古活字本では「かんせうじやうハ、ゑんきぐわん年、かのとのとり、五月廿五日に、つくしへ、ながされ給ひ、おなじく三年、みづのとのいの年つくし、あんらくじにて、御せいきよ、なり給ふとかや、」と、菅原道真の経歴について具体的な日付や元号を用いて説明されていた部分が、整版本では「その、ち、かんせうじやうハ、つくし、ゑの木寺にて、御せいきよ、ならせ給ふとかや。」と簡潔なものになっている。また、落馬した患者への

療治の場面で、「たかくらのあん、打まけさせ給ひつ、三井寺さしておち給ふ寺と宇治との間にて、高倉の院六度まで、御らくばありしなり、これは、さきの夜、ぎよしんならざるゆへ也、此こ、ろもちをもつて、ねさするなり」と、高倉の院の落馬の話を詳細に語っていたのが、整版本になると「たかくらのあん、うちまけさせ給ひしも、御しんならぬゆへなれば。かれを、もつて、ねさする也。」というように短くまとめられている。整版本で説明が省かれた箇所は、本筋に入るまでの余談にあたる。これらの例からは、余分な説明の省略という意図が推測できる。こうした異同は、内容面での増補・改訂とは別の、表現を磨き上げる目的で行われた改訂として捉えられる。

つまり、寛永整版本『竹齋』の特徴について考察するためには、解釈に関わる異同と、そうでない異同の二つに分けて考える必要がある。本稿では、解釈に大きく影響しない異同は「表現方法の変化」とし、整版本で新たに追加された内容や、古活字本と整版本で解釈が異なる異同は「表現内容の変化」として、それぞれ検討を進める。

「表現方法の変化」については、三つの種類に分類できる。一つ目は、同様の内容を言い換えたものである。例えば、古活字本の「むらさきのいろなへだてそかきつばたむかしもいままはなのゆかりは」という歌が、整版本で「むらさきのいろなへだてそかきつばたにおふ花のゆかりとおもへば」と改められている。その他にも、「きえやらぬふじのけぶりや世の中のかひはたえせぬためしなるらん」という歌が「きえやらぬふじのけぶりや世の中の人ハたえせずこひやしぬらん」に詠みかえられるという変更も見られる。

二つ目は、整版本『竹齋』には、古活字本で文章中に似たような表現が繰り返し用いられていた部分に、省略や変更が施されるという例がある。こうした反復表現の修正には、名古屋での療治譚の一つ、『瘧の患者の話』に顕著な異同が見られるため、後程この例を取り上げる。

三つめは、大まかな話の流れは同じであるものの、叙述の順序に変更が見られ、話の展開が整理されているものがある。こちらの例については、療治譚の内の《なすびの香の物の話》を後述する。

これらを踏まえると、寛永整版本『竹齋』の「表現方法の変化」の特徴として、全体の文章量は増えている反面、似たような表現や説明的な部分は簡略される傾向にあるということが分かる。

「表現内容の変化」については、内容が新規に追加されたものと、内容そのものの変更の二つに分類できる。新たに追加された話とは、『黒谷の切腹の噂話』、『一条の有徳なる人の話』、『腹中を患った妊婦の話』である。この中でも『腹中』については、『黒谷』や『一条』のように、先行研究で詳しく触れられた例を見ないため、整版本の改訂を新たな視点で考察するうえで、検討の余地がある。

その他、名詞が複数箇所にわたり変更されている例として、竹齋が京内参りの際に見た能楽師たちの名前の変更、瘡気療治の際に竹齋が書いた好物の書き付けの内容の変更、といった例がある。これらの中でも、能楽師の名前の変更については、松田修氏の先行研究がある^{〔註10〕}。松田氏は、人名の変更は古活字本から整版本への時代の移り変わりに合わせて書き換えたものであるとし、『竹齋』が持つ好性について述べている。本稿では、もう一方の例である瘡気の好物の書き付けの例について検討したい。

三 表現方法の変化について

「表現方法の変化」について検討するために、反復表現の修正の例として、『瘧の患者の話』を取り上げる。これは、名古屋で開業した竹齋が最初の療治を行う場面である。竹齋は瘧（マラリア）を患った患者に対し、熱はないか、頭痛はしないか、虫（腸内寄生虫）はないかと尋ね、偶然にも病状を言い当てる。以下に古活字本、整版本それぞれの本文を引用する。

古活字本

竹齋ミやくをかんがへて、ねつきハなきかと、といければ、
ねつきすこしありといふ、さてこそ申さぬ事かとて、手ぐすみ
してぞとびしる、づうハせぬかと、といければ、こびんの
あたりいたむと、いふ、さてこそ申さぬ事かとて、手ぐす
みしてぞ、とびしる、むしはなきかと、ひければ、つねづ
ね虫ありと、いふ、さてこそ申さぬ事かとて、手ぐすみして
ぞ、立しる、さて、くすりをあたへける、まことに、時のし
あはせにや、おこりは、其ま、おちにけり

整版本

ちくさい、ミやくをが(ママ)んがへて。ねつきハなきかと、
いければ。ねつきハあると、申けり。さてこそ申さぬ事かと
て。手ぐすね引て、とびしる。づつうハせぬかと、とひけれ
バ。こびんのあたりがいたむと、いふ。さてこそ申さぬ事かと
て、じまんがほにぞ見えにける。むしハなきかと、ひければ。
つねづむしも有と云。さりやこそ、さやうにあらんといひ、

てぐすねしてこそ、みえにけれ。さて御薬をあたへける。まことに、時のしあハせにや。おこりハ、そのまゝ、おちにけり。

両版とも、患者の病状を尋ね、患者がそれに応え、竹齋が反応を返す、という一連の問答が三回繰り返されている。

傍線部に注目すると、古活字本は三回の問答すべてが「さてこそ申さぬ事かとて、手ぐすみしてぞとびしさる」というように、ほぼ同様の表現が用いられている。このような繰り返しは、読んでいてやや冗長に感じられる。一方、整版本では、はじめの二回を「さてこそ申さぬ事かとて」、最後の一回を「さりやこそ、さやうにあらんといひ」と変更している。また、古活字本の「手ぐすみしてぞとびしさる」に該当する箇所が、「手ぐすね引て、とびしさる」、「じまんがほにぞ見えにける」、「てぐすねしてこそ、みえにけれ」というように、微妙に異なった表現に書き換えられている。これにより、繰り返しのごとさが緩和され、より洗練された文章に変化している。

こうした似たような言い回しを繰り返すことの利点として、文のリズムを作り出すという効果がある。その点においては古活字本と整版本のどちらも工夫されていると言えるが、古活字本の方は、竹齋の反応が単調で機械的な印象を受ける。整版本では、それぞれ表現を変えることで、古活字本が持っていたリズム感を引き継ぎつつ、主人公竹齋をより表情豊かに描き出すことに成功している。整版本におけるこのような表現は、読者を飽きさせないための工夫と考えられよう。

その他にも、この名古屋での療治譚各話の冒頭部分でも、古活字本ではその多くが「又さる人の事なるに」で統一されていたもの

が、整版本では、「又、あるかたの」、「又、さる人」というように、細かく変更されている。古活字本にこのような繰り返しが多いことは、『竹齋』が元来「語り」をもとにした文芸であることに由来する。

次に、叙述の順序の変更の例として、『なすびの香の物の話』を取り上げる。話のあらすじは、ある人が熱気の病を患い、由緒ある医者が集まって薬を調合していた。竹齋はそこに加わり、なすびの漬物を処方する。その理由は「熱い湯漬けの中になすびの漬物を入れると冷めるからだ」と言い、それを聞いた人々はみな笑った、というものである。各版の本文を以下に引用する。

古活字本

又、ある人の事なるに、ねつきのやまひを、わづらひけり、うとくの人の事なれば、れきくくすしあつまりて、くすりかけんを、だんがうする、竹齋も人数にくわはりて、竹齋す、み出て申けるやうは、はゞかりおほき、申事にては候へ共、其やうなるかげんにてハ、ねつきはなかくさめじとぞ、申ける、さらば、ちく齋かげんをうけ給はらんと、云ひければ、竹さい申けるやうハ、なすびのかうの物を一きれくわへ申たきと、いひければ、ミナ人々どつとわらひけり、

ちくさい、もつてのほかに、はらをたち、みなくめんくたちハ、物をしりてわらひ給ふか、又、物をしらで、わらひ給ふか、其子細は、めしのゆのあつき時に、なすびづけをゆの中へ入れ候へば、あつきゆも其まゝ、さむると云ければ、又かさねて、どつとわらひけり

整版本

又もこりず、ちくさいハ。ある人、大ねつきをわづらひけり、

れきくくすし、あつまりて。はいざいする。ちくさいも、だんがうにくハ、りて申けるやうハ。ねつき、さめがたく候へバ。さあらバ、なすびのかうの物を、一きれくハへたきと申けれバ。さてくめづらしきかげんかな。しさいハいかにと、ひけれバ。めしのゆのあつきに。なすびのかうの物を入候へばさむる程にと、いひけれ。バ、みな人、どつとわらひけり。

竹齋の言動に対する人々の反応として、両版共に「どつとわらひけり」という表現が用いられている。古活字本では二回繰り返されていた「どつとわらひけり」が、整版本では一回に減らされている。古活字本では、一回目の「わらひ」が、竹齋がなすびの香の物を取り出したときに起こり、その後、腹を立てた竹齋が薬の子細を説明したところで、二回目の「わらひ」が起こる。これは、人々に笑われた竹齋が腹を立て、納得がいかに自ら薬の子細を語りだすという展開である。

古活字版では、「人の熱氣を冷ますために飯の湯を冷ます方法を取る」という竹齋の療治の突飛さに対する笑いよりも、藪医者である竹齋自身を嘲笑する意味合いが強い。一方で整版本では、人々と竹齋の掛け合いの中で、薬の子細が自然に説明され、そこで笑いが起こる。この改訂によって、藪薬師竹齋の突飛な療治という部分に笑いの焦点が絞られている。この話の面白さは竹齋が出鱈目な薬の子細を得意げに語る部分にある。「なすびの香の物」という薬種を紹介しただけで笑いが起こる古活字版の本文は、少々唐突である。改訂者は、古活字本の竹齋自身を笑うような展開に疑念を抱き、版を改める際に整版本の形に書き直したのではないだろうか。

四 表現内容の変化について

「表現内容の変化」について、まずは複数個所の名詞の変更の例として、『瘡氣療治の好物の書き付け』を取り上げたい。この話は、竹齋が瘡氣（梅毒）を患う患者のために好物（病気に効くとされる食べ物）を書きつける場面である。以下に各版の本文を引用する。

古活字本

又、さる人の事なるに、かさけのわづらひありやとて、竹さい、くすりをあたへける、まづ、かう物をかいてやる

一、とびのやきもの、すゞめのすし、からすのみそづけ、ごぼうのまるやき、たかのしほづけ、もずのやき鳥、ふくろうのやきとり、くじらのものに、よだかのあぶらあげ、わしのすいり、川うそのまるやき、きじのすし、おほかた、このぶん参るべし

整版本

又、さる人、かさけをわづらひけり。ちくさいのくすりをあたへけるが。まづくかう物をかきてやる

一、とびのやき物、一、すゞめのすし、一、たかのすいり、一、からすのみそづけ、一、ごばうの丸やき、一、ふくろうのさしみ、一、くじらのやき物、一、かほうそのまるやき、一、なまこのやき物、一、夜だかのあぶらあげ、一、どしやうのかまぼこ、一、かみなりのまなこ、一、せん人のしらみ、一、てんぐのなし物、このぶんまいり候べし。

古活字本では食べ物を列挙するだけであるが、整版本では一つ書きの形式に書き換えられている。一つ書きに改められたことで、古

活字本に比べ、患者に渡すリストであるということが視覚的にも分かりやすくなっている。

また、古活字本と整版本の間で、好物の内容がいくつか変化している。その中でも特徴的なのが、整版本の最後の部分に「かみなりのまなこ」「せん人のしらみ」「てんぐのなし物」の三品が追加された点である。これらはいずれも現実には存在しない想像上の品物である。こうした物を付け加えることによって、竹斎の療治の荒唐無稽さが強調されると言える。

古活字本の「ふくろうのやきとり」と整版本の「ふくろうのさしみ」に注目してみよう。ふくろうはそもそも鶏肉の中でも食用に適していないが、火を通さずに刺身で食べることは更に一般的ではない。食材に対する調理法が敢えて適さない物に書き変えられているのである。好物と調理法の関係については、その他にも松本健氏の先行研究がある^{註1}。整版本は、竹斎の藪薬師というキャラクターを強調するとともに、そこから生じる滑稽を強く打ち出している。《なすびの香の物》の話と同様に、このような主人公竹斎の藪医者という性格を作品全体の笑いの基調とすることで、読者を限定しない明らかな笑いを実現しているのである。

次に、整版本で新たに追加された話の例として、《腹中を患った妊婦の話》を取り上げる。以下に本文を引用する。

又、ある人のないぎがた。くわいにんとこそ、聞えけれ。折ふし、ふくちうをわづらひ。うミちをくだしけれバ。ちくさい参り、此よしをみるよりも。すいかうやくをまるめて、のませければ。ふく中の子、むなさきへすひあげにけり。あたりの女ばう、とりあげば。是ハ大事の事かなとて。みな人あきされ

バ。ちくさい、申けるやうハ。すこしも、くるしからず。いでく、此わづらひのおこりを、かたりてきかせ申べし、ふく中なる子が、たうがさをわづらふゆへに。そのかさのしるが、くだるなれば。さて、かうやくをのませたとぞ、申ける、とりあげば、申けるハ。それハ、ともあれかくもあれ。むまれ月の事なれば。いかハせん、と申ける。ちくさい申けるやうハ。さあらバ、たゞ今、むませてミせ申べきとて。かのぎしやくを、こにして、へそにつけ、れバ。しきりに、けこそつきにけれ。さてこそ、申さぬ事かとて。いまやをそしと、まちけるところに。何かハあるべき。とりあげば、ががたをうちこし。むかハ三げんバかり、とび出にけり。ちくさい、てがらをしたりとて、どつとわらひにけり。

この話では、飲み込んだ薬によって赤ん坊が胸まで吸い上げられる、赤ん坊が生まれる際に向かい三軒ほど飛び出す、などの、現実の事象では到底考えられない描写が存在する。これらは、医療の知識が乏しい者が読んでもフィクションであるということが明確に分かるように、敢えて誇張して描かれたと考えられる。そのおかげで読者は、作中の出来事を一般的常識から切り離し、喜劇として楽しむことが出来る。こうした状況の中で慌てふためく産婆たちの様子と、さも当たり前であるかのような竹斎の態度に落差を感じるからこそ、滑稽味が生まれるのである。

こうした『竹斎』における療治譚は、京都から江戸への東下りの途中、竹斎が名古屋で開業する場面から始まる。三年の開業生活の間に繰り広げられるこれらの話は、短く機知に富んだ笑話的な構成となっており、竹斎の藪医者としての本領が発揮される場面であ

る。整版本における各話は以下のような順に展開する^{注5)}。

① 《瘧の患者の話》	古活字本・整版本に共通
② 《鉄くずが目に入った鍛冶屋の話》	
③ 《落馬した患者の話》	
④ 《瘡気療治の好物の書き付け》	
⑤ 《なすびの香の物の話》	
⑥ 《青梅を喉に詰ませた妊婦の話》	
⑦ 《井戸に落ちた子供の話》	
⑧ 《腹中を患った妊婦の話》	

本稿で取り上げる⑧《腹中》の話は、作中の他の療治譚と多くの類似点を持つている。以下、本文の登場順にそれらを紹介する。

② 《鉄くずが目に入った鍛冶屋の話》

あるところに鉄くずによって目を腫らした鍛冶屋がいた。竹齋が磁石の粉を糊に混ぜたものを目に貼りつけると、三日ほどで鍛冶屋の目は治った。竹齋によると、その効果は人を吸い寄せる磁石山から取ってきた材料のおかげだという。

この話は磁石が登場し、療治は成功するという点が⑧《腹中》と共通している。

⑥ 《青梅を喉に詰ませた妊婦の話》

あるところに青梅を喉に詰ませた妊婦がいた。竹齋が磁石を口に押し付け梅を取り出そうとするが、効果はない。次に吸膏薬を口に張り付けると、梅は出てきたものの、妊婦の目と鼻が吸い寄せられてしまった。

この話は妊婦が患者として登場し、薬として吸膏薬と磁石が用いられるという点が⑧《腹中》と共通している。また、赤ん坊を産ませる、梅を取り除くというそれぞれの療治の目的は達成したものの弊害が生じている、という内容の面でも類似がみられる。

⑦ 《井戸に落ちた子供の話》

あるところに井戸に落ちた子供がいた。竹齋は吸膏薬を戸板に塗り付け、井戸に蓋をする。しかし、子供は助かることなく死んでしまった。竹齋は懐から取り出した本を読み上げ弁明するが、やがて取っ組み合いになってしまふ。

この話は吸膏薬を使用しているという点が⑧《腹中》と共通している。しかし、この話では療治が成功せず、井戸に落ちた子供は死亡してしまふ。

以上の共通点や類似点から、整版本の改訂者が⑧《腹中》を創作した意図について、次のように推測される。

まず、改訂の手法としては、『竹齋』という枠組みの中で、古活字本の既存のモチーフに着想を得て作られていることが指摘できる。複数の話と関連性を持つこの話は、脈絡がなく混沌と評されることの多い『竹齋』^{注6)}に収録された各話の、同一作品としての繋がり深めている。

次に、その内容は、『竹齋』が持つ朗らかな滑稽性を強めるものとなっている。最も内容が似通っている⑥《青梅を喉に詰ませた妊婦の話》では、常識ではあり得ない大げさな表現を用いることで、竹齋とその患者をより一層コミカルに描いている。⑧《腹中》もこれと同様に、読者にとつての娯楽のために作られた滑稽話の一つで

ある。

更に、このような創作を行った目的として、古活字本の療治譚の最終話として収録されていた⑦《井戸に落ちた子どもの話》の死の要素を和らげることが考えられる。⑦《井戸》は、竹齋が一度店を構えた名古屋を離れるきっかけとなっており、竹齋は最後に「筒井筒井筒に落ちし人の子の科をば我ぞ負ひにけらしな」という『伊勢物語』「筒井筒」のパロディの歌を詠んだ後、そのまま東下りの旅に戻っていく。⑦《井戸》は、こうした物語の流れを作るために、整版本への改訂の中でも外すことが出来ない重要な話であったと考えられる。しかし、話の中で、竹齋は子どもを死なせてしまったことで、暴力沙汰に発展するほどの強い非難を浴びている。⑧《腹中》は、こうした子供の死や暴力といった後味の悪さを軽減するために作られた話なのではないだろうか。名古屋での医者生活をたのみ、追われるように再び東下りを始めるという流れの中で、⑧《腹中》がかなり唐突な位置に挿入されていることも、この推測を裏付けよう。

以上、《腹中を思った妊婦の話》が増補された意図について考察してきた。その手法・内容・目的を踏まえると、こうした改訂は古活字本『竹齋』の朗らかな笑いを発展させ、欠点を改めるようにして作られたと推察することが出来る。

整版本の改訂についてまとめると、まず表現方法の面では、冗長な反復表現は修正され、唐突に思われる展開においては、叙述の順序の変更が行われていた。これらは、内容を整理し、話を読みやすくする意図があったと考えられる。表現内容の面では、瘡気の好物の中に空想上の物を付け加えるなど、竹齋の藪医者としての側面を

強める改訂がなされていた。それと同時に、作品全体の滑稽性もこの一点に集約されていた。また、《腹中を思った妊婦の話》のように、一見不調和に思われる増補も、読者を意識して、既存の『竹齋』より発展した形にしようという意欲が感じられるものであった。これにより、古活字本から整版本への改訂の中で、『竹齋』における笑いがより分かりやすく、より明るい、様々な層の読者に受け入れられるものへと変化しているのである。

これらの要素に加えて、表記の面での細かな変化も見られ、整版本『竹齋』は文字情報としてより理解しやすい、読みやすい形に変化していることが分かった。こうした表現的に整理されている形式、内容的に幅広い読者を意識したものの改訂からうかがわれるのは、整版本『竹齋』が、世間に流布していくことに対する期待である。それは、『竹齋』が、語りとしての面白さを越え、出版され、大衆に受け入れられる「読み物」になったということでもある。整版本『竹齋』は、古活字本の『竹齋』から、文章の体裁を整え、より多くの読者に読まれることを想定した読み物として再編された作品であると言える。

四 おわりに

『竹齋』という作品は、江戸時代初期に成立した仮名草子で、古活字本の後に、大幅な異同を含む整版本が作られた作品である。先行研究では、整版本での改訂を否定的に捉え、古活字本を重視する意見が多い。また、整版本は異同の考察のために特定の場面を取り上げられるものの、『竹齋』として評価されている意見はほぼ見ら

れない。こうした研究状況に対し、本稿では古活字本と整版本の本全文体にみられる異同の特徴や内容から、整版本『竹齋』の改訂がどのような趣向をもとに作られたのかを考察してきた。

『竹齋』が成立した江戸時代初期は、文学そのものが、作者が見聞きした話を取り留めもなく書き連ねたものから、作品全体のまとまりを意識した読み物として洗練されていく過渡期にあった。寛永整版本『竹齋』は、このような文学の発展の過程で生まれた、読み物化の成功例であると言える。読み物化の背景には、印刷の技術や出版の文化が発展し、物語が単純な娯楽から商業へと変化していったことの影響が考えられる。

寛永整版本『竹齋』成立の時代には、整版を用いた印刷方式によって、より多くの書物が出版され、書籍の需要が高まっていた。そうした流れの中で、高い人気であった『竹齋』の整版化を望む読者は少なからず存在していたと考えられる。

仮名草子の多くの作品は、御伽衆などの狭い集団の中から生まれたものが多く、内容的にも技巧的にも内輪で盛り上がることを想定して作られたものであった。こうした作品が、版を重ね、読者が増える中で、より幅広い人々の興味を惹くような内容へと再編されることは自然な流れである。内容の普遍化は、それだけ読者の広がりがあったと好意的に解釈することができる。

『竹齋』の作者と改訂者の問題について、仮に古活字本の作者を富山道治とするならば、整版本の改訂も同じく道治が行ったとするには違和感のある内容が存在する。それは、本稿で取り上げた腹中を患った妊婦の話で見られる、医学的に明らかでない描写である。おそらくこれは、医学に関わりのない人物による創作であったと考

えられる。『竹齋』を改訂し、幅広い読者の需要に応えるのは簡単なことではない。改訂者は、本屋などの出版に直接関わることできた人物ではないかと想像される。

また、『竹齋』の根底に世の中に対する批判の精神を読み取れるか否かという点に関しては、寛永整版本の『竹齋』に描かれる竹齋の人物像には当てはまらないと考える。そもそも『竹齋』成立の時期に好まれた笑いの傾向は、パロディや風刺を含むものであった。こういった表現には世相への批判の態度が少なからず含まれている。しかし、それはあくまで笑いを生み出すための方法にすぎず、時には一般的な道徳や倫理観すらも度外視される場合がある。しかし、こうした場合にも目的はあくまで笑いにあり、世間一般の常識に当てはめてその是非を論じることはできない。

竹齋は、志高く世の中を啓蒙しようとしていたり、逆に徹底的に不憫な目に遭うことで理不尽な世の中を体現したりという、思想的な人物ではない。作中に代表される、「くすしにハじやうずもへたもなかりけりひいきくにときのしあはせ」の歌のように、時には褒められて図に乗り、時には失敗して責められながら、のらりくらりと藪医者を営むコメディアンなのである。

注

(1) 井浦芳信「古活字本『竹齋』の研究」(『近世国文学』第一輯、一九四二年)。

(2) 石川了「『竹齋』の変容―滑稽諷刺紀行の視点から―」(『国文学・解釈と鑑賞』第五五卷(二二)、一九九〇年三月) 参照。

(3) 松田修「『竹齋』の成立―假名草子の時好性―」(『國語國文』

第二六卷第三号、一九五七年三月）参照。

(4) 松本健『竹齋』の瘡氣療治』（『日本語と日本文学』第三七号、二〇〇三年八月）参照。

(5) ⑤《なすび》と⑥《青梅》の間に、竹齋が招かれた先で患者に薬を処方するも、効き目がないばかりか信用を失ってしまい、竹齋がそれを己の身なりの貧しさ故だと嘆く場面がある。この場面は、古活字本では独立した章段、整版本では⑤《なすび》の後半部分として扱われているものの、両版に共通した内容であるため、表中に含めなかった。

(6) 鈴木亨『竹齋』の方法』（『近世前期文学の主題と方法』、和泉書院、二〇〇八年。初出『島根大学法文学部文学紀要 文学科編』第十五卷（一）、一九九一年七月）参照。

〔付記〕

本稿は、令和三年度山口大学人文学部国語国文学会研究懇話会（令和四年二月五日 オンライン開催）における口頭発表をもとに執筆いたしました。発表時にご質問くださいました末枡昌子先生に心より感謝申し上げます。

（てらもと・あさひ）